2007

NEWS LETTER

No.19

kyodai-noyakuzemi

NEWS LETTER No.19
INDEX

はじめに … 2

農薬裁判から40年目の省農薬ミカン山 … 3

仲田さん、今年のミカンどうですか？ … 5

新人レポート … 6

「見えない」不安と「見たくない」気持ち
ー食の問題を考えるー … 7

2006年度アンケート報告 … 8

おわりに … 11

省農薬ミカンとは？

1967年に起きた農薬事故を契機につくられた、農薬をできるだけ減らした栽培方法（省農薬）でミカンを栽培する省農薬ミカン園が和歌山県海南市下津町にあります。ミカン農家の仲田芳樹さんと農薬ゼミは手をとりあって省農薬ミカンの栽培・販売を行っています。

発送ラベルのご確認を！！

配送されてきた段ボールに貼り付けられている配送ラベルをご確認ください。茶封筒が間に挟まれており、その中に請求書もしくは贈り物状を入れさせていただいております。（大学での受け取り、ゼミ員による配達を希望された場合は、茶封筒の挟み込みがない場合もあります。）

はじめに

和泉賀津子

今年もミカンの季節がやってきた。

農薬ゼミは、その活動の大きな柱に省農薬ミカン園というフィールドがあり、農薬をほとんど使わないミカン作りを実践している。その省農薬ミカン園で穫れたミカンを毎年販売し、多くの方にミカンを味わってもらうと共に、省農薬について考えていただく機会としている。売上げの一部は、ゼミ活動の費用となる。

毎年のことだが、ゼミの秋は忙しい。いつもの勉強会と並行して、ミカン販売の準備が始まる。９月頃から、注文書の検討、印刷、発送、注文開始、注文の入力作業、注文に関する問合わせの応対、、ニュースレターの作成、宅配便の手配などなど、京都での作業は続く。その間に、ミカン園での秋調査やミカンの収穫が行われる。ミカン販売近くになると、直前の準備に追われる毎日だ。そうしていよいよ販売当日を迎える。省農薬ミカンが買ってくださった皆さんの元に届く日だ。販売の後には、ミカン代金の回収作業が待っている。年によっては、年始注文を受ける場合もあり、ミカンシーズンのすべてを終えるのは、毎年２月くらいになる。

一連の作業は大変だが、ミカンを届ける側として気になるのは、その年のミカンの味と収穫量である。思い返せば私がゼミに関わり始めた頃のミカンは、本当に酸っぱかった。元々酸味の強い品種であったことに加え、ミカンの樹が若かったためと思われるが、この頃に初めてミカンを買ってくださった人の中には、その酸っぱさがトラウマになり、その後一度も買ってくれない人もいる。その頃はこのミカンの由来を一生懸命伝えて、買ってもらえるよう努力をしたと思うが、正直、味に関しては、最初の頃はとてもしんどかったことを思い出す。

しかしその後、有機肥料を加えたりして土を改良し、だんだん樹も成熟していくことで味は変化していった。近年は酸味と甘みのバランスが取れているとても美味しいミカンだと思う。とはいえ、その年の天候によって味は変わるので、毎年の味は一定ではない。抜群に美味しい年もあれば、いまいちの年もある。でも、長年ミカンとおつき合いいただいている方々は、そういった天候との関係も含め、今年はどんな味かと待っていてくださるので、本当にありがたい。

収量も年によってずいぶん変化がある。一般には表年裏年があり、収量は隔年で増減すると言われているが、省農薬ミカン園はここ数年豊作が続き、ミカンを売り切ることに多くの労力を費やしてきた。ところが去年は冬の寒さの影響で、いつもの年の半分程度しか穫れず、全く注文に応じられない事態となった。これはゼミにとっては、前代未聞の緊急事態だった。ゼミのメンバーが注文できないのはもちろんのこと、 OBや身内と言った無理を言える人には、すべて頭を下げて注文をお断りし、何とか切り抜けることができた。昨年ミカンを口にできなかった方々には本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、農業は天候に大きく左右されることを強く実感し、こんな年もあるのだという良い経験にもなった。

そして今年は、一変して、ミカン園始まって以来の大豊作になりそうである。収穫が間に合うのか、売り切ることができるかどうか不安がいっぱいである。何とかたくさんの注文を受けられるよう、年始の注文も最初から受けることにした。昨年とは全く違う大変さだ。

今年は、１２月に皆さんの手元にミカンが届く頃も、まだまだ年始の配達に向けてゼミの作業は続いているはずである。
ミカンの味や収量は、年によって悲喜こもごもの思いをもたらすが、このミカンを愛してくださる皆さんのおかげで、省農薬ミカンは続けていくことができる。これからも省農薬ミカンを支えてていただきますようよろしくお願いいたします。（いずみかつこ＝京都市職員）

↑夏調査の合間に流しそうめん

農薬裁判から40年目の省農薬ミカン山

石田紀郎

いまでも忘れがたい光景がある。１９７７年１２月１７日の和歌山市内にある和歌山地方裁判所法廷で、和歌山県海草郡下津町からやってきたミカン農家の数十人、東京、大阪、神戸、京都などなどからやってきた市民／消費者がはげしい怒声をあげていた。それぞれの十数年の思いを発していたのだろう。ただ、主張はたったひとつである。この日、故松本悟さんの両親が息子の死を無駄にするまいと提訴した国と会社を相手どった損害賠償裁判の判決が下されたのである。十年近い裁判であった。人々が非難しているのは、その裁判の判決内容ではなかった。裁判長が傍聴人にほとんど聞こえないほどの声で判決文の主文を読み上げるや否や退席してしまったからである。判決主文は「原告の請求はすべて却下する」という短いものであるから、読み上げるには数秒もあればよい。裁判長はたぶん読み上げたのだろうが、傍聴人が着席する時の椅子の音や足音でかき消されてしまった。人々が怒ったのは、一人の若者の死に対する答えを宣言するならそれなりの礼儀がいるだろう。だれにも聞こえないような小声で、そそくさと逃げさる無礼を非難していたのである。かつて多くの命が農薬事故でこの世を去った。しかし、日本では誰一人として農薬会社や農薬の許認可の権限をもつ国（農水省や厚労省）に対して、裁判という形で論戦を挑んだ農民はいなかった。松本悟さんの両親が最初の農民となり、論争を展開してきたのである。だから、その訴えを退けるなら退ける礼儀があるだろうというのが傍聴人の怒りである。しばらくは収拾がつかない事態が続いたが、別室で裁判官が説明するということで落着したのであるが、この裁判官の振る舞いは当時の国の考えを現していたように思える。「農薬なしで農業は成り立たないのは明白で、農民も金儲けのために大量に使っているのだから、農薬中毒で死んだからと言って国を訴えるなどとは言語道断である」との世情を反映して、裁判官はもともと真摯に問題を論究していなかったのである。
その後に入手した判決文も至る所で論理矛盾があり、お粗末そのものであった。傍聴人の怒りは、主文を読み上げて逃げるように法廷を出て行った裁判官の姿勢に判決文の内容まで感じとったのだろう。この時からさらに１０年間の長い大阪高裁での審理が続くのである。
松本悟さんがどのような経過で農薬中毒死したかを詳述する紙面がないが、悟さんの事故死を簡略に書くと次のようになる。農業高校３年生の夏に、

両親とニッソールという殺虫剤をミカン園で散布し、その日の夕方からはげしい農薬中毒症状を呈して入院したが、残念ながら翌々日に亡くなられた。１８歳の無念の死であった。国が認可している農薬で中毒し、解毒剤もないままに治療法もなく死に至るのは国の欠陥行政と会社の誇大宣伝と毒性実験の不十分さのなせる結果だというのが両親が提訴した出発であった。その後の多くの薬害事件や公害事件を見ると、両親の直感的な疑問は正しかったといえよう。和歌山地裁での敗訴にめげることなく、両親は控訴し、１９８６年まで裁判を続けられた。そして、大阪高裁の仲介もあり、会社と和解されてこの裁判は終結した。日本の農薬問題の歴史の中で非常に重要な裁判と位置づけられる。国の農薬行政や会社の開発販売の全般にわたって大きな影響を与えた。

その裁判の過程で省農薬ミカン園が始まった。私が初めてこのミカン園を見たのは１９７５年頃だったろうか。新しく切り開かれた赤土ばかりが目立つ山の斜面に、胸くらいの高さしかないミカン樹が植えられていた。年とともにミカンの木は成長し、１０年もすると密生したミカンの木がたわわにオレンジ色の果実を秋には見せてくれるようになった。このミカン園の所有者は悟さんの叔父である仲田芳樹さんである。農薬問題に立ち向かった兄を後ろから支え続けた弟である。口数は少ないが、園を開拓し、最初から農薬を可能な限り省く栽培法に挑戦しはじめた。ここでも、「農薬なしでミカンなどできるはずがない」という世間の常識への挑戦であった。それから３０年、幾多の苦難を乗り越えて省農薬ミカン園は成長し、もっとも活性の高い壮年期となり、年々収量を増やしている。世間の風潮も、農薬散布なしの作物を求めるようになっている。農薬裁判を初めてから４０年の歳月が経過した。この４０年にわたって農薬問題を無口に訴え続けて来た松本武、仲田芳樹兄弟とその家族や村人に感謝あるのみである。私たち農薬ゼミも何十人、何百人の先輩や仲間をこのミカン園で育ててもらった。そこに育ったミカン果実を介して、これからも多くの物語が世の中に広がり、農と食の安全、安心、安定を実現する人々の動きが起こるだろう。（いしだのりお＝京都学園大学教授）

↑病害虫調査をするゼミメンバー

COLUMN

毎日農業記録賞受賞！

今年11月15日、農薬ゼミの活動を報告した論文が毎日新聞日本農業記録賞の優良賞を受賞しました！16日の毎日新聞に受賞が掲載されました。また京都の地方面には受賞者として太田の顔が大量のみかんとともに大きく掲載されました。受賞はとてもうれしいことですが、農薬ゼミの30年間の歴史を一人で持っていったようで非常に恐縮でした…（太田）

仲田さん、今年のみかんどうですか？

富山博喜

今年のミカンの出来を生産者である仲田さんとの会話の中で聞いてみることにしました。

と…富山
な…仲田さん
ま…松崎

と…「今年のミカンの量はどうでしょうか？」

な…「今年は着果量がすごく多いな。二年前の豊作のときよりもまだ多いな」

と…「具体的に何箱ぐらいできそうですか？」

な…「2,200か2,300といったところやろか」＊1

と…「今年のミカンの味はどうでしょう？」

な…「味はよろしいわ。夏にあんまり雨が降らんかったから。ミカンて水分が多かったら、糖が高ならんし、水っぽいミカンになる」

と…「今回使った農薬と回数を教えてください」

な…「一月にマシン油と四月の上旬にスプラサイド、スプラサイドゆうたらヤノネのためにな(＊2)。それからいつもはやらんのやけど、今年はダニが出てダニカットやったよ。乾燥したときにダニがわくんや。その３回やな」

と…「今年の天候状況というのはどうでしたか？」

な…「夏に雨がほんとに少なかった。水が少なかったから玉が小さい。でも甘い」

と…「消費者は大きいミカンを求めているんじゃないですか？」

な…「あまり大きなミカンは好まんのと違う？は好まんのと違う？水っぽいから。M、Ｓが一番え」

ま…「ＭやＳは取引が高めなんですか？＊4」

な…「高めや。市場はうまいミカンのサイズ知ってるな。」
と…「今年一番苦労したことは？」

な…「摘花よ。梅雨が短くて花が自然落下せんかった」

と…「今年は豊作なんですけど、来年はどうなります？」

な…「来年のことは分からんけど、まあまあ適当に花咲くんちゃうかとワシは読んでんけどね」

ま…「ミカンの木は植えてから何年くらいなんですか？」

な…「25年くらい。一番ええ年齢やね」

と…「来年から仲田さんの息子さんが帰ってくるって聞いたんですけど」

な…「来年からしてくれるよ、ハハハ」

と・ま…「これからもよろしくお願いします」

＊1…一昨年は約1800箱、去年は約1100箱
＊2…マシン油はカイガラムシの防除に用いる。スプラサイドは実際にはサンマイトとスプラサイドの混合です。
＊3…ダニカットは9月に使用されたので注文書掲載には間に合いませんでした。
＊4…SSは5.0cm～、Sは5.5cm～、Mは6.1cm～、Ｌは6.7cm～とJAは定めています。

新人レポート

松崎豊

農学部でもなく新入生でもない工学部5回生の私が、農薬ゼミに入会したのは今年4月。次年度から農業系企業へ就職することになっていた私は、乏しい農業経験を入社前に多少なりとも補っておこうと農業関係のサークルをフラフラと見学していました。その新歓期を通して、複数のサークルに入会しましたが、その一つが農薬ゼミでした。

農薬ゼミの省農薬みかん園を訪れたのは、甘いみかんの花の芳香が辺りに立ち込める5月のお花見と、すくすくと育つみかんたちの健康状態を観察する8月の病害虫調査の二回。「悟の家」を拠点として、流しそうめんや青竹を器にした炊き込みご飯などを自炊し、豊かな自然を満喫しながら、泊り込みで作業を行いました。私はそれまでみかん園を見たことがなかったので、見るもの聞くもの新しいことばかりでしたが、印象に残っているのはやはりこのゼミの真骨頂である病害虫調査です。方法は、数人が一組になって、ランダムにサンプリングした木がどんな病気や害虫にどれだけ侵されているかを目視によってランク付けするというものでした。ヤノネカイガラムシやそうか病が主な病害虫で、ベテランの方々は慣れた手つきで葉をかき分け次々と見つけていくのですが、最初私には闇夜のカラスを探すようなものでした。ただ、後半になってくると私もさすがに慣れてきて、レア害虫のルビロウムシを見つけようものなら思わず歓声をあげてしまいました―もっとも、害虫はいない方が良いので不謹慎ではありますが。

さて、この病害虫調査で面白かったのは、農薬ゼミの二つの取り組みでした。一つは、穴のあいたカイガラムシが教えてくれました。害虫対策にもできるだけ農薬を使わないようにするためにここでは数年前からカイガラムシに寄生するハチを放つ試みを始めたのです。最近ではそのハチもすっかり土地に根付き、調査では寄生蜂があけたとおもわれる穴を持ったカイガラムシの死骸が沢山発見されていました。病害虫との戦争の末、ついに平和協定が結ばれたのですね。

もう一つは間伐です。みかん園は海岸に面した山の斜面にあり、単位面積当たりの収量をあげるため、木が群生している状態にあったので、作業の負荷はかなり大きいものでした。しかし、園の一部で間伐が行われたことによって、その作業効率が向上しただけでなく、風通しも良くなり病害虫発生の軽減効果も期待できるということを聞いて感心しました。土地面積を基準にしたハード中心の農業ではなく、投入資本当たりのリターンで考えるソフトの視点が農業に与えられた意義ある事例ではないかと思います。

栽培、販売、農薬、農村社会、周辺環境、政策、教育等々、みかん山やゼミ勉強会などの活動は、農業に対する多角的な視点を私に与えてくれています。いろいろと考える機会を与えてくれるということで、私にとっては「脳薬ゼミ」であると言えます。おあとがよろしいようで。（まつざきゆたか＝工学部５回生）

「見えない」」不安と「見たくない」気持ち一食の問題を考える

脇田　千鶴

長かった学生生活をようやく終え、今年の4月より東京のある生協の職員となりました。農薬ゼミと私の働く生協とでは、顧客数（組合員数）でも100倍ほどの違いがあり、省農薬ミカンの小さな流通から、少し大きな流通の現場へと足を踏み入れた形になります。この半年あまりの間「社会人になってどう？」などとよく訊かれましたが、家賃を自分の力で払えるようになったという（大きな？）変化を除くと、実は「あまり変わらないな」というのが実感です。省農薬ミカンの小さな流通のためにやっていた様々な作業と、生協の少し大きな流通のためにやっている仕事を比べると、作業の一つひとつにはほとんど違いがないのです。当たり前のようですが、私にとってこのことは新鮮な発見でした。しかし同時に、同じような作業を組み合わせて流通を形作っているにもかかわらず、規模が大きくなるほどどうしても構造が複雑化し見通しが悪くなりやすいという実状もまた、改めて実感させられました。

見通しが悪いということには2つの問題があると私は考えています。一つは見たいのに見えないこと。もう一つは、見ないですむということです。

今年は原材料の偽装問題をはじめとする食の不安材料が次々と出現し、食が「見えない」不安が社会的に高まっていることは周知の通りです。その一方で、見えないことに対する不安を抱えていても同時に「見ないですませたい」思いもどこかで併せ持っているのではと私は考えています。矛盾しているようですが、食べる側の安全に関わる情報は見て安心したい一方、見て「しまった」その周辺を取り巻く事情や問題まで関わることは、それはやはり楽なことではないからです。一例を挙げると、海が放射能で汚染される可能性があることから青森県六ヶ所再処理工場稼動に反対する運動を展開している漁協があります。稼動が中止されれば海は汚染されず今までと同じ海産物を生産することができますが、再処理工場が稼動した場合、消費者である私は決断を迫られます。何も見ていなければ他の産地のものを買うなど簡単に判断できるかもしれませんが、生産者の方の葛藤、汚染の状況、原子力の問題など海産物を取り巻く様々なものを見て「しまった」とき、そこで自分はどうするのか、自分の問題として簡単ではない決断を迫られることになるのです。「見ないですませたい」気持ちをどう奮い立たせていくかということは、「見えない」問題と同じぐらい、あるいはそれ以上に大きな課題だと思います。

省農薬ミカンは、小さい流通だからこそ見通しがよい。目の前のミカンだけではなくミカンを取り巻く様々な事情を見つめることは楽ではないけれど大切なことなのだ、ということをあらためて考えさせられる毎年の便りでもあります。見えない不安と見ないですませたい気持ち…矛盾した思いは乗り越えていけるでしょうか。省農薬ミカンを食べながら新しい仕事場でがんばります！

（わきたちづる＝農学研究科2007年卒業）

COLUMN

βクリプトキサンチン

ミカンなど柑橘類に含まれるβクリプトキサンチンには強い発ガン抑制効果が認められている。

にんじんなどに含まれるβカロテンの5倍の効果があるとされ、また温州みかんの果肉には他の柑橘類の60倍以上も含まれるという。

ガン対策にもみかんを食べて元気になりましょう！省農薬ミカンは冬限定なのが残念です…

2006年度アンケート結果報告

小川詩乃

昨年度のミカン販売では、不作の影響で、多くの方の注文をお断りすることになりました。この場を借りてお詫びを申し上げます。そんな中、News Letterに同封したアンケートに対する回答を50通近く頂きました。皆様のご意見は、販売に関わる私達「農薬ゼミ」のメンバーと省農薬みかんの生産者である仲田さんにとって一番の励みでもあり、今後に役立つ指針でもあります。

今回は、2006年度アンケート結果と、よく寄せられるご意見、ご質問を紹介します。

【甘さ】 1 2 3 4 5

（甘くない ↔ ちょうど良い ↔ 甘すぎ）

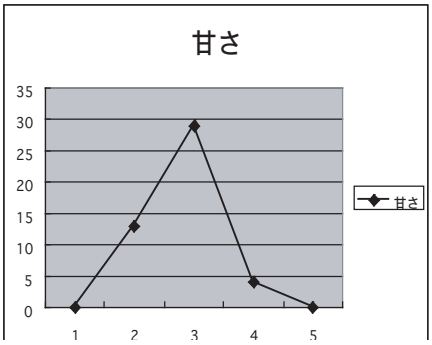
【酸っぱさ】 1 2 3 4 5

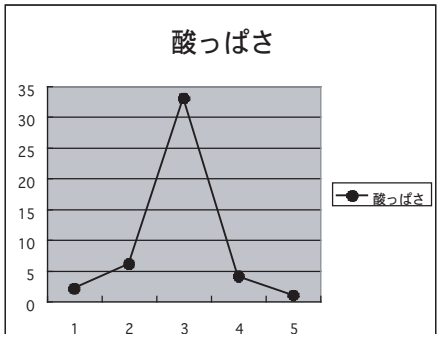
（酸っぱくない ↔ ちょうど良い ↔ 酸っぱすぎ）

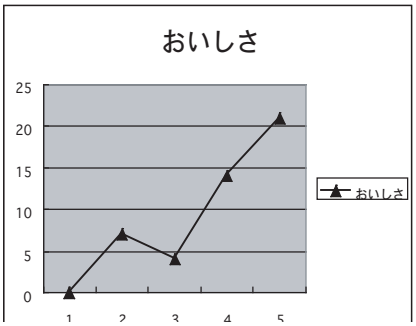
【おいしさ】 1 2 3 4 5

（おいしくない ↔ おいしい）

結果は以下の図の通りです。







ここでは詳細は省きますが、甘さや酸っぱさの評価が同じであっても、おいしさの評価に違いがあるという例が見られました。当たり前の事かもしれませんが、「おいしい」と感じる要素は単なる「甘さ」や「酸っぱさ」という基準では計れないということですね。

省農薬ミカンの販売当初からご購入いただいている方からは「省農薬ミカンの作り始めの20年前は、皮はかたく、つやもなく、酸っぱくて酸っぱくて…。最近のみかんは夢の様です。」とのご感想を頂きました。試行錯誤していた頃の昔の味を知っている方にとっての「おいしさ」は、20年前のミカンの味を知らない私達とはまた別のものなのでしょう。

また「市販のものは本当に甘いが、このミカンはスッパイですね。」「もう少し甘さがあると良い。」「酸味と甘味があり、今まで食べたことない美味しさでした。」「昔ながらの田舎の味わいがあります。」とのご意見も頂きました。省農薬ミカン園では病害虫調査の継続性を考慮して植え替えを控えており、開墾当初のままの品種です。そのため昔ながらの味が好みの方には喜んでいただいていますが、苦手と感じる方もいらっしゃる様です。

「一つ一つの味が違うから評価をつけられない」とのご意見もいただきました。ご指摘の通り省農薬ミカンは、糖度が高いものだけを商品とする流通形態ではなく、一本の木に生ったミカンを丸ごと味わって頂く方針を採っているため、ミカンによって味に個性があります。「どんな木のどんな所に生っていたのかな」と考えながらそれぞれのミカンを味わっていただければ幸いです。

◇省農薬ミカンの量・大きさについて

ミカンの量に関してのアンケートでは「少ない…２名、適量…４２名、多い…３名」という結果になりました。これより、従来通り省農薬ミカンを1箱10kgでお売りするのが妥当であると考えられます。「10ｋｇを２箱いただいておりますが、一くくりにして20ｋｇでお願いできませんか。」とのご意見もいただきました。ミカンの箱詰めは仲田さんお一人でなされているので、２箱以上ご注文されている全ての件数に対して一くくりにするという作業は大変な負担ですので、現在の所はその様な対応はできかねますことをご了承下さい。

また大きさに関しては「色々な大きさがあることにとまどいました。しかし、これが本当の姿なんですね。」「Sサイズのミカンが多いからMサイズのミカンを多くして欲しい」というご意見もいただきました。ミカンの木には様々な大きさのミカンが生りますが、Sサイズの大きさのミカンが多いというのが現状です。ちなみに、ゼミのメンバーにとっては「Sサイズの方が、味が凝縮して美味しい」とSサイズの方が人気で、一度に何個も食べています。皮を剥く手間は増えますが、味が凝縮した美味しいミカンをぜひご賞味下さい。

◇省農薬ミカンの傷みについて

ミカンの傷みに関してのアンケートでは「０個…２０名、１～５個…２１名、６～１０個…１０名、１１～１５個…１名、１６～２０個…１名」という結果になりました。また「今年は特に美味しく感じた」というご意見をいただく一方で、「今回は新鮮さに欠けている様に思えた」というご意見もいただきました。この様に、傷みの数や意見が分かれた理由を検討してみた結果、ミカンを箱詰めしてからお届けするまでの時間の差ではないかとの考えに至りました。この反省を踏まえ、詰めたらすぐに出荷するという形式を取ることを改めて仲田さんと確認しました。

また省農薬ミカンは、仲田さんが手選別で傷のないミカンを箱詰めしていますが、収穫直前に殺菌等を行っていないので天候によってはどうしても傷むことがあります。市販の場合は、傷んだミカンを省き小分けして販売することが可能ですが、仲田さんの元から箱詰めで直接お手元に届く場合はそれができません。そのため、予め傷みの分を考慮して多めに詰めておりますので、少量の場合はどうぞご理解下さい。ミカンは箱から出して乾燥させることで、傷みの度合が変わってきますので、ぜひ実行してみて下さい。届いた段階で腐りの数が多い場合は交換させて頂くこともありますので、農薬ゼミの方までご連絡下さい。

◇農薬ゼミについて

2006年度のNews Letterについては「今までで一番楽しく、良く皆様のご活躍の様子が分かりました。」「『人もみかんも働いたら休まなきゃねぇ。働き過ぎたらいい仕事はできない』は良い教訓ですね。同感、同感。」など沢山のご意見をいただきました。誰にどんな原稿を書いてもらうか等を考え抜いた編集者にとって、News Letterについてのご意見をいただくのは最高に嬉しくなる瞬間です。今年の編集者も知恵を絞りに絞っていましたので、どうぞ2007年度のNews Letterもじっくりお読みいただければ幸いです。また昨年は６名の卒業生に対しての激励も数多くいただきました。そのうちの一人には今年のNews Letterの原稿も書いていただいていますので、ぜひご覧下さい。

◇最後に…

「是非頑張って無農薬で成功させて下さい。」「みかんだけでなく日本の食品が本当に安全なものであることを、一母親として願ってやみません。」というご意見もいただきました。

日本全体、世界全体で誰もが安全で美味しい食品を食べられる事は究極の目標です。私たち農薬ゼミの活動も多くの皆さまに支えられ30年も続いていることに改めて感謝しています。どうぞこれからも「京大農薬ゼミ」と「省農薬ミカン」をよろしくお願い致します。（おがわしの＝理学部3回生）

MEMO

あとがきにかえて

太田　健

一面緑色をした山の斜面に生るたくさんのミカンを見て気合いを入れる大学生。これほど珍しい人間はいないのだろうなあとつくづく思います。三年目ともなるとミカン園の光景も見なれたものとなり、収穫から販売までイメージできるようになってきました。これまでの文章にもある通り、今年の一連の作業が一段と大変になることは想像に難くありません。また年を追うごとに農薬ゼミの活動に誇りというか、自信というか、愛着のようなものができてきてミカンの販売はもちろん、病害虫調査についてもその意義を他人に説明できるまでになりました。

農薬ゼミには省農薬でミカンを育て、売ることによって、食の安全や農業・環境問題に対する世間の認識を変えてきたという自負があります。実際、農薬ゼミの活動が30年目を迎えた現在でも、活動を応援してくださる方がたの数はありがたいことに、ますます増えています。ようやく自分の活動の意義を確信し始めた私を考えれば、何年も農薬ゼミの省農薬ミカンをご愛好くださっているみなさんのほうがよっぽど学者なのではないでしょうか。

順調に活動が続いているように見える現在の農薬ゼミにも、解決しなければならない問題がたくさんあります。特にその一つがメンバー不足なのです。実を言うと1,2回生がいないのです。新しく農薬ゼミの活動に参加される人も上級生が中心。現在活動の中心となっている3回生の間では一番の悩みの種です。農薬ゼミの活動に魅力を感じないのか、それともそれを伝える能力がないのか…私たちとしてはやれるだけのことはやっているのですが。省農薬で持続的な農業をしているのに、方やメンバーが持続していかなければ笑うしかありません。今年の大量のミカンを売り切ることもそうですが、メンバー獲得にも全力をつくさなければならなくなってきました。

今年、農薬ゼミは毎日新聞農業記録賞を受賞したり、朝日新聞の明日への環境賞の一次審査を通過し審査中であったりと、社会的にも学術的にも活動が認められる機会に恵まれました。この機会をフルに活用し、より多くの人から評価される活動に発展させていかなければなりません。そして、その中には少なからず学生がいて、私たちの活動に参加する「ミカンを見て気合いを入れる学生」になってくれたらと願って止みません。（おおたけん＝農学部3回生）

今年も数多くの方にご注文をいただきまして、まことにありがとうございました。
今年は　例年にない豊作であり、まだ在庫がございますので、引き続き年始にお届けするミカンの販売をしております。
みかん箱に同封の追加注文書にご記入の上、News Letterの裏表紙に記載されている農薬ゼミの宛先まで、FAXか郵送にてお送り頂きますようよろしくお願いします。
追加注文の締切は12月31日までとなっております。尚、宅配方法は宅配便のみ、お支払い方法は郵便振込のみとなります。

※資源節約のため余った注文書も利用しています。ご了承下さい。

京大農薬ゼミ

自主活動ゼミ　1978年京都で発足
1967年和歌山のミカン園にて起きた農薬中毒事故をきっかけに、「農薬は減らせる」を合い言葉に、学習活動を続けています。ゼミの特徴は、単に「農薬は減らせる」と主張するだけでなく、和歌山の省農薬ミカン園をフィールドとして、実際に農薬を省いたら農業はどうなるのか、農薬を減らして栽培したミカン園では害虫や病気がどうなるかを、栽培に関わりながら実践的に調査・研究を続けて来ました。その調査のための基本となる農薬や環境に関する知識や理論を勉強するゼミを毎週金曜日に開催しています。
　興味を持ってくださった方は、お気軽に下記の問い合わせ先にご連絡の上、是非一度足をお運びください。

NEWS LETTER No.19

発行者
〒606-8227
京都市左京区田中里ノ前町21石川ビル305
Tel&Fax 075-711-4832
E-mail　kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp
URL　http://dicckais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP/index.html
振替口座番号「01070-0-36598」加入者「農薬ゼミ」

2007年12月1日　第１版発行